

戦後日本の小児保健

巷野悟郎先生（こどもの城小児保健クリニック院長）へのインタビュー

巷野 何か大体ありますか？ 尋問の文句は（笑）。何かお宅の方で。大ざっぱで結構ですが、私どもは何からやっていいか分からないから。

質問者1 ごく大ざっぱなものです。

質問者2 先生方が医師として働き始められたころから10年目ぐらいが一番興味を引かれる時代なのですか。

巷野 分かりました。いつごろ生まれてどうなったかという過去にさかのぼって見ていくと、いろいろ面白いものが出てくるので。

質問者1 お母さんの側から。

巷野 そうそう。例えば今、子供がおかしいでしょう。殺人があったでしょう、正月のころに。あの子供たちはいつごろからそうだったのか。そのお母さんは、大体平均して第一子が28歳から29歳ですから。30年前はどうだったかということにさかのぼっていくと非常に合うところがあるので、こんな表を使っています。もしよろしかったら差し上げますから、使ってください。ちょうどこのところが戦争です。こんなものを書き込んでいくと面白いですよ。この辺でこんなことがあったとかね。こうやって追っていくと、時間感覚が出てくるので。

何か話のよりどころがないとお宅も質問しにくいと思うので、私なりの小児保健とのかかわりの経過を、ちょっとお話しさせてもらいます。

質問者1 お願いします。

巷野 戦争が始まったのが昭和16年（1941年）で、戦争が終わったのが昭和20年なんです。私は、大学を昭和20年に卒業する予定だったんですけど、半年繰り上がりまして、昭和19年9月に卒業したわけです。

卒業するときに、どこかの科に属さなければいけない。私は、前から外科が好きだったの。外科的なのが好きなので、形だけですけども、外科の医局に入局したんです。戦争中ですから、要するに軍人として、戦地で外科的なところで国のために働こうという。そんなことを言うとちょっと笑うかもしれませんが、私が生まれたのは大正10年ですから。それから後はずっと見れば分かるように、昭和の始めごろから満州とか中国での戦争が始まったりしていますね。私どもが教育を受けたのは、国のためとか、そういうことで習っていたので、今の人たちは「本当かいな」と言うかもしれないけれども、戦争が始まるころになってきたら、国のためにやろうということ。要するに、国のために死んでもいいという気持ちがある、純粹にあったわけですよ。それで、働くなら外科がいいだろうということで、戦争にもなるからということで、行ったわけです。私は19年に卒業して、20年1月の初めに、ちょうど今ごろよりちょっと前ですけども、中国へ行く予定だったんですね。

質問者1 それは戦争の…。

巷野 戦争中。それで、九州の門司、あそこから病院船で香港の方へ行く予定だったんですけども、病院船というのは世界の赤十字を付けていきますから、夜はネオンサインをつけて、敵は攻めないことになっていますからね。それで渡って、台湾まで行ったわけです。それが1月中旬に着いたら、もう戦争たけなわで、そこから行けなくなって、結局台湾に戦争が終わるまでいたんです。

21年の3月に戦争が終わって、あとは船で日本へ引き揚げてきたわけです。そして、待っているわけでしょう、外科が。でもね、このたった1年間の戦争に行っている中で、戦争が終わった段階で、もう本当に自分の思考すべて、何もなくなっちゃったんです。戦争で負けて、物はないし、戦争で負けたということで、何というか、人生面白くなくなっちゃってね。要するに外科のようなああいうしゃきしゃきしたものをやる勇気がなくなっちゃってね。もう医者辞めちゃおうかなあと思って。本当にそんなような気持ちでいたわけです。

人間嫌いだな。それでも外科を辞めて、もっと人間に関係のないことをやろうと思って、ウイルスとかそういう基礎医学を心掛けていって、公衆衛生に名前が変わったけれども、ウイルスの部門に入ったんです。ちょっと外科の方ではなくて。

そういうところはあまり関係がないから簡単に言えますけれども、結局ウイルスに行ったけれども、物はないし、やるものはなし。それでまた変な気持ちになっちゃって、いわゆる理事長の方にもまた言って、まあわがままですね。あのころは、そういう連中が随分いたけど。それこそ外科に行く勇気もなし、私の親父が内科だものですから、内科へ行ってやるのもなんだか……。要するにもうなんというか、自分の価値観というものが全部変わっちゃったわけです。

質問者1 物が無いというのは、やっぱり研究もできないような状態……。

巷野 研究なんかもちろんできないけれども、まあ、やろうと思えば何でもあるわけですから。それで、子供の方へ行ったんです。教授に小児科の方へ紹介してもらって、臨床に入ったというのが大体ですね。20年に戦争が終わって、21年に小児科に入ったわけなんです。小児科では臨床をやったわけです。

もちろん、試験管を振るような研究はできませんけれども、症例報告はいくらでもできます。そのうちに、続々と先輩が戦地から帰ってきたりして、臨床の方もはかどって、21年、22年、23年ぐらいは、臨床を主に、2年ぐらいやると小児科なんか外へ出たりします。

そのころは、アメリカが日本に入り込んで厚生省を押さえていますから、アメリカさんが厚生省の行政を牛耳るわけですね。そして、子供のための、あるいは母と子のための部署をつくれということでできたのが、今ある児童家庭……昔は児童局と言ったんですね。Children's bureau（児童局）といって、母と子の問題をやる。その中に母子衛生課というのができたわけです。その母子衛生課ができるに当たって、また新しく作るんですが、東

大の方に小児科医と産婦人科医と整形外科医を1人ずつ出せと。それとあと、保健婦、助産婦、看護婦を1人ずつ出せということで、東大の小児科の方に、誰か小児科医を出せと来たわけですね。

質問者1 整形外科も入っていたんですか。

巷野 整形も入っていました。これがいいですね。それが後で、随分役に立っているわけです。障害児のリハビリができます。

質問者1 最初からそういうことを考えて。

巷野 始めから入っていた。アメリカってすごいですね。障害者のために整形外科が入っていた。大きいですね。それで助産婦が入って。ですから、子供に関係するすべての科がそこで大体足りるでしょう。

質問者2 これはもう、ある程度アメリカからフレームワークとして。

巷野 もうアメリカから来ているんです。もう全部アメリカですから。後輩とか先輩も、誰々行かないか、行かないかと教授に言われたわけだけれども、みんな断ったんだね。臨床から行政へ行くことを、みんな。それで私のところへ回ってきたわけ。行かないかと。

私は、個人的なことを言えば、親父は田舎で開業していたし、それを継ぐ兄貴もいますし、医者になっています。私は兄弟が多くて、一番下で自由なものですから、うちへ帰って親父に、「厚生省へ行けと言うんだけど、どうだろう」と言ったら、「面白いじゃねえか」と言ったわけね(笑)。「それも経験じゃねえか」というわけだね。そうだな、面白いな、誰もやんねえことをやってみるかっで感じて、2年と言われたんですよね。2年間行って、基礎のために。「じゃあ行きます」と言ったら、教授が喜んでね、推薦されたわけ。

そのころ、推薦された産婦人科の医者は誰だったかな。やっぱり大学の方から推薦されて。それから整形外科が、小池文英さん。小池文英というのが整形外科から、私よりも数年先輩でしたけれども、来られました。その方がその後、整肢療護園の園長になって。要するに肢体不自由児施設では日本のぴかーの人です。

そういうメンバーで厚生省に母子衛生課というのができたわけです。当時の課長が、これは東大を出た産婦人科の医者で、瀬木先生。その人は戦争中、東大の産婦人科からドイツへ留学させられて、ナチスドイツの下でいろいろな勉強をしてきて、公衆衛生的なあれで来たの。戦争中にドイツでやっていたんでしょう。妊産婦手帳というのを作ったんです。

質問者1 ドイツにあった妊産婦手帳を日本に……。

巷野 導入した人なんです。戦争中、要するに妊娠中の女性の体を守ろうということで、妊産婦手帳というのを戦争中につくって、それを物の配給などに使ったんですね。物がなない時代ですから、例えば脱脂綿だとかいろいろあるでしょう。米だとかそういう配給などにその妊産婦手帳が使われて、要するに妊産婦を守る手帳をつくったわけです。

質問者1 それを出して、配給してもらおうという形なんですね。

巷野 そうそう、配給してもらおうということで、非常によかったと。私も持ってますけどね。その方が初代の母子衛生課長になって、日本全体の母と子の保健問題を取り扱うこと

になった。

私はその下に入って何をしたかという、一番最初にやったのは、まず外国のデータが何もないですから、厚生省がある日比谷ですね、その日比谷に図書館がありましたから、通ってアメリカの文献をあさって、外国の情報を。

質問者1　そこへ来ていたわけですね。

巷野　そこへ来ていたんだ、アメリカの雑誌はね。しかし私は、英語をほとんどやっていないんです。ドイツ語でしたから。だからもう分からなくてね。もう本当にあのころは、一番先に行ったときに、「ナース」なんていったって、何だっけ、ナースはなんてね（笑）。恥ずかしながら本当に、英語はほとんど戦争中に。

質問者1　敵国語ですよ。

巷野　大学はほとんどドイツ語の図書です。英語が分からなくてね……。辞書を引き引き、アメリカの乳児死亡率がこのくらいだとか、公衆衛生のデータをね。その点、小池文英さんという人は、どこで勉強したのだから、英語の会話もできまして、珍しかった。ですからそのころ、母子手帳の案を私がつくって、母子手帳を、いつもこうやって線を引ながら、何ページにしようかといろいろなことをやると。ある程度できると、それを小池文英さんが英語に直して、そして、私と小池文英さんと課長と一緒にアメリカさんのところに行って、「もう1段増やせ」とかいろいろなことをやって。それで母子手帳ができたわけです。

質問者1　最初は妊産婦手帳だったのを……。

巷野　妊産婦手帳を母子手帳にしたわけ。「妊産婦手帳」と妊婦さんだけではなくて、子供をくっつけたわけね。それで母子手帳。

質問者1　それが初めてですか？

巷野　初めてできたの。ああ、その前に児童福祉法ができたんです。私が母子衛生課に行った20……。

質問者1　22年ですね。

巷野　そうですね。できたのではなくてそのころから、いろいろと案がつくられて、私が行ったのは23年なのかな。そのころまだ、児童福祉法というのをつくっていたんです。私もああいう法律をつくる場所に参画して、いい経験をしたと思いますけれども、法律というのは本当に、すべての人がそれを使うわけですから。いろいろな条件の下で使うわけですから。そのとき要するに、夜になると局長室にみんなが集まって、ああでもない、こうでもないで文章をつくって。その中に、母子健康手帳の制度が取り込まれていって。だから平行して、私は母子手帳を何回もつくったりして、やがて母子児童福祉法が公布されて、母子手帳が交付されたわけです。

その母子手帳がつくられて普及されることについては、これはやはりこの研究と同じ厚生省の研究報告、今から4年ぐらい前に母子健康手帳の経過、厚生省から研究費が来て、母子手帳ができる課程のことは本ができていますから、見たことがあるのかな。厚生研究でやりました。そこに中村安秀さんも入っていたと思います。それから当時、私が厚生省

にいたときの私と同じ年配ぐらいの事務官がいて、まだ若い、27歳ですから、一緒にやったその事務官もまだ元気なので、そんな人と呼んで、そのころ母子手帳をつくるときのお金はどうしたんだとか、いろいろなことがそこに書いてありますので、参考にさせていただければと思います。

それで母子手帳ができて、そのころ、私は何をやってたかというところ、昭和25~26年の乳児死亡率が当時70ぐらいですかね。昭和22年が76.7、それが一番高かった。その前は統計がなかったですから。戦争中の2~3年。統計ができたのは22年で、76.7。23年が61、24年が62というふうに下がっていったわけです。いずれにしても、このころは70ぐらいなんですよね。戦前の乳児死亡率は出てきますが、大正10年ころというのは、170ぐらいでしたかね。それが戦後、76.7ということで、外国の中からはかなり高い方でした。オーストラリアだとかニュージーランドなんかは低いですね。それから、スウェーデンとかも低い。

ですから、このころは日本の母子保健の程度というものが、乳児死亡率から見ても世界の中で随分と落ちているということが分かるわけで、その乳児死亡率をいろいろなところで見てほしいと、分析したわけです。

じゃあ、なぜ死んでいるんだろう。統計はあまりないから、戦後でね。そのころ、統計調査部というのが厚生省にできて、乳児死亡率などの計算ができたし、死亡原因は何だというようなことが出てきたわけです。当時一番多かったのが、やはり発育不良、あるいは栄養失調、肺炎、そういうふうなものが非常に多いわけ。

質問者1 発育不良というのは、栄養不良と同じと見ていいんですか。

巷野 栄養失調症ですかね。ええ。ですからそういうものを総括して、何と名前を付けたかな、当時ね。虚弱児かな。何かそういう、要するに弱い子供ということで統計を取っています。私は持っていますけれども、後でもしよかったら。要するにそういう栄養失調のような、食べ物が無い、それから感染症が多いというようなことで、かなり死んでいるわけです。

また探せば出てくるんですけど、全国の大学病院にアンケートを取って、現在どういう患者が病院に入院しているかというのを取って、その子供たちが、母乳なのかミルクなのかというのを取ったりしたのが、つい最近もあったんだ。どこかにありますよ。面白いんです。そうしますと、もう今ではないような、くる病だとか、ビタミンDの不足とか、いろんな病気があります。今は皆さん方、見たことがないような病気です。要するに戦争が終わった後、環境がよくないし、食べる物が無いしというようなことの結果が、乳児死亡率に出ていましてね。当時、外国の乳児死亡率を見ると、半分以下、あるいは10分の1ぐらい。10分の1はいかないかな。3分の1とか統計で。アメリカは、日本に本がないものですから、進駐軍の本を借りたりしながらやりました。

それよりも、もう食料がないものですから、そのころ私がやった仕事は、今の農林省ですね。そういったところに行って、日本のミルクをどうするかというような。日本に乳牛

が何頭いるかなんていう計算しながら、人工栄養児が何%いるから、人工でいくと年間何石（昔は石を使ったわけだ）ミルクが必要だと。そうすると、牛1頭当たり年間何石ぐらいつくられているから、何頭の牛が必要だとか、そんな計算ばかりさせられてね。

それで、そういう牛を入れるために国が便宜を図ってやったり、飼料（えさ）をどうするかなんていうことを計算させられました。それと同時に、アメリカから穀物資という、児童救済品というのかな。外国から、日本の子供たちを救うためにということで、脱脂粉乳が日本にまず入ってきた。皆さん方はもうあまり脱脂粉乳は飲まないでしょう。要するに脱脂粉乳というのは、バターを取った後のかすですね。牛乳から脂肪を取ってしまった後の残り。たんぱく質は多いんですけども、そういう脱脂粉乳が穀物資として日本に輸入されて、学童給食に使われたわけです。

だから、日本人がああころ助けられたのは、まさにアメリカが助けてくれて、しかもその穀物資の影響が非常に大きいという。もう本当に、基本的な食べ物を入れてくれたということが、今の日本を救った大きなことではないでしょうか。

質問者1 かなり大きな、量的にも、期間的にも安定したものが……。

巷野 そういうものを、保健所だとか、あるいは育児相談などを行っている病院のところで、お母さん方に配給したわけです。私なんかもそういうところを随分立ち上げました。あれがなかったら、おそらく子供は、さらに栄養失調で死んだりしていたんじゃないかと思えます。脱脂粉乳がいかに救ったか。そういうわけでアメリカが主ですけども、アメリカ、ヨーロッパの先進国は、戦争でやられたところを助けてくれた。大きいですね。

感染症が多いですから、人工栄養でミルクを飲ませるときに、今はもう簡単に消毒しますけれども、当時は消毒するための燃料もないわけで、どうやって消毒するかという、そこまでアメリカは指導してくれましたね。どうようにやったかという、鍋もないですから、石油缶。石油缶にお湯を入れて、それを火で。あれははんだでできていますから、本当に火だと溶けて石油缶も壊れちゃうわけだけど、中にお湯が入っていますから、結構やかん代わりになる。その石油缶にお湯を適当に入れて、その途中にはしを渡して、そこに洗ったほ乳瓶を入れて、そして熱湯消毒。

質問者1 各家庭で……。

巷野 今ではしないけど、アメリカ軍のナイトという医者がいまして、これは母子手帳のところに出てくるんですけど、アメリカの医者が厚生省のわれわれだとか東京の何人かの小児科の指導医師を集めて、確か日赤だったかどこかで、こういうふうによれと、消毒しろと、そこまで指導されたわけ。要するに人工栄養は、感染によって赤ちゃんがそのために死んでしまうこともあるから、消毒しなくちゃ駄目だと言われたんですが、それを国が日本中に指令を出せと。今でも覚えているけど、結局普及しなかった。そんなところで、そこまでやられると、こちらは何となくこう……ね。当時の気持ちとしては、何言ってんだと。そこまで指導することはない、こちらが医者なんだしということで。確か直接指令まではしなかったと思うけれども、あちこちでそういう情報は見に行っただと思います。

アメリカが、Oilcan Method と。そういうことで指導。

要するにアメリカというと非常におせっかいで、くる病が多い、日光浴しろとか、そういうようなことを、ドクター・ナイトという小児科医が来て、それがもう本当に牛耳っていましたね。あれをやれ、これをやれ。もう逆らうことはできないわけですから。それで日光浴をしろとか、考えてみれば、そういったことが戦後の日本人を救ったかもしれない。

それから日本には、疫癘という病気がある。そういう連中が日本に来て、今もある東京の駒込病院。あそこは伝染病院でしたから疫癘が随分入ったので、そういったことでドクター・ナイトが入って、そこでちょんちょんと研究したというか話を聞いた結果、要するに疫癘というのはカルシウムの欠乏なんだというようなことを言って。冗談じゃない。そんなのは日本だって、昔からテタニーというのがあるんで、カルシウムが減ればけいれんを起こす。そんなことから、カルシウムを取れとかなんとかと言って。実際に疫癘はそうじゃないんですけれども。

そういうわけで、アメリカなりに随分日本の子供のことを考えて、栄養の問題、それから日光浴の問題、おむつの当て方。これは向こうから助産婦さんが来まして、その助産婦さんが子どものおむつの当て方までやってきました。日本でもおむつをし始めたのはせいぜい明治ぐらいからですから。それまで江戸時代は、みんなぼろつきれを当てたようなものですから。おむつをやるときには女性のおこしみたいに、足をこうやって全部巻きちゃっていたんですね。これは今でも中近東へ行くと、スワッドリングという、くるくる巻きですよ。日本もそういうような形式だったので、そういうことをやっているから股関節脱臼を起こすんだということで、これはさっき言った整形外科の小池さんなどがアメリカから指導されて、そういう巻き方は駄目だと。あの中で足が開いていなくちゃ駄目とかね。それから、股関節脱臼を早く発見するために検診でこういう検査をなささいとか。これは小池さんが整形外科の立場から、全部指導を受けてやったんですね。

アメリカもそういう整形外科、産婦人科、小児科の医者がいて、それぞれの部署で日本の基本的なものを指導したんです。日本では愛育会に小児保健部会というのをつくって、月に2回ぐらい、東京近在の大学の小児科の教授クラスを集めて、いろいろな会議をさせられたわけです。小児保健部会と母性保護部会と2つあって。小児保健部会の方の面倒を見たのが、愛育病院にいた院長なんですね。斎藤文雄という先生がおられて、それから、産婦人科の方はもう1人いるんですね。愛育会病院の部長をしている方、その方が中心になって小児保健部会なんかをやって、そしていい大学の教授を集めて。

私は厚生省にいたから、そこに出席して、アメリカさんから私が言われる、厚生省が言われる、それを持って、小児保健部会に行って、相談するわけですね。果ては Oilcan Method と来たけれども、どうしたらいいでしょうなんて言ったら、今でも覚えているけど、「そんなことまでアメリカに言われる筋合いはねえ」とかみんな、もう（笑）。戦争が終わったばかりだから、みんな、いろんなことを言われていると、「そんなことはちゃんと知ってるわい」とかね。まあ、なかなか日本も頑張ったんですけれども。

でも考えてみると、向こうとしてはいろいろなポイントを押さえて、足りないものは送ってくる。いろいろなことをやって、それにしても実情を知らなければ何もできないということで、厚生省に統計調査部というのができたんです。これはアメリカさんがつくったんです。厚生省ができるぐらいのときに統計調査部というのができて、そこが全国統計を全部集めて、それは今でもありますよね。あそこは随分いろんなことを集めていますけれども、そこがいろいろな調査をしていますね。死亡率、中でも乳児死亡率は毎年の定石評価になるぐらいです。

ご覧になれば分かりますように、おおよそ見ると乳児死亡率というのは大体 10 年刻みで半分になっています。大体計算をすると、もうご存じだと思いますが、昭和 22 年、23 年ごろから、76、70 ぐらいでしょう。それから昭和 33 年、30 年ぐらいになりますと、乳児死亡率が大体 40 になるんですよ。書いておくといいですね。これは 40 ぐらいになる。昭和で言うと、ちょうど戦争が終わったのが 20 年。10 年刻みで計算しなおしているの、昭和で言いますと、昭和 30 年が大体乳児死亡率が 40 なんです。それから、昭和 40 年になりますと 20~18 で、大体 20 になるんです。半分になる。実にきれいなんですよ、これは。

質問者 1 半分、半分で行くわけですね。

巷野 ええ、30 年が 40 として見るといいですね。昭和 30 年が 40、そして 40 年が 20。それから、50 年が 10。ちょうど 50 年が 10 です。49 年が 10.8、50 年が 10、59 年が 6.0、60 年が 5.5%。まあ大体 5 と付ければいいですね。60 年には 5、それからあと、10 年たった平成 7 年ぐらい。これから後は半減しないんです。5.0 になりましたら、あとは平成 6 年、10 年後が 4.3%。それから後はずーっと下がってきて、平成 14 年が 3 と。ですから、5 という昭和 60 年。1,000 人生まれて 5 人というところまでは、戦後半分、半分なんです。ところが 5.0 になりますと、これが限界なんでしょうね。乳児死亡率がゼロになることはないですからね。未熟児だっているんだし。これから後は正念場で難しいんでしょうけれども、それでも日本は 3 にはなって。始めのころなんか大きいですよ。70 人で 50 人死んでいたのが、40 人まで下がってきたわけですね。

このころさらに効果があったのが、予防接種の義務接種じゃないですか。要するに、児童福祉法というのは、いろいろな意味で子供を守ってくれましたよね。例えば、私は今、保育所の方もやっていますけれど、当時、浮浪者がたくさんいたわけです。今はちょうど、向こうのスマトラ大地震で子供たちがふらふらしていますけれども、ああいう子供がたくさんいたわけです。浮浪者が。親がいない子供たちが町にうろうろしていましたから。それからお母さん自身も、子供がいても働かなくちゃならないけど、どうしようもない。子供が足手まといになるということで、保育所をつくったわけです。

児童福祉法の中に、児童福祉施設というのが、児童のための施設がつくられたわけでしょう。これは、当時まだ、子供なんかにかまっていられないような状態だったわけですよ。大人が食うか食わないか。それをアメリカさんのあの力が大きかったんですね。要するに子供のための児童福祉法というのをつくった。法律。大人にしてみれば、もっと戦地から帰



ってくる人を助けたいし、お年寄りもいるし、助けたいけれども、法律で子供を守ったわけです。

その中に児童福祉施設というのがあって、例えば子供がゼロ歳、子供が育てられないときには、保育所に入れろと。要するにお母さんが家庭で子供を育てられないときには、保育所に入れなければならないという、義務だったんです。そのために、入れなければならないと国が言うんですから、入ればそこでお金があるわけ。だから、国はそのときに、入った子供に対して措置費という、そういう言葉で措置すると。1人入るといくらと払って、保育所をつくって、子供を守ったわけね。

それから乳児院もできたでしょう。乳児院はゼロ歳児だけれども、1歳まで入れられるわけです。昼間だけではなくて、24時間育てるのが乳児院です。昼間だけが保育所。あとは肢体不自由者。脳性まひが多かったですから、そういう子供たちは肢体不自由児施設に入れろと。それから、2歳以上で育てられない子供は養護施設に入れる。もうそういうような施設をたくさんつくったわけね。これはまた、厚生省、アメリカが自分たちの国でやっていた、そういう前例があるんでしょう。福祉国家ではね。そういうものを児童福祉法の中に全部盛り込んでやって、それらすべてが、私たちがいた母子衛生課が担当して。

質問者1 国としては余裕がないけれども。

巷野 ないですよ。ないけれども。

質問者1 法律としてもう。

巷野 法律をつくっちゃった。

質問者1 つくられて、でも、それがちゃんと機能して……。

巷野 機能していた。それで、アメリカが見ていますから。予算だってなんだって。それから予防接種法というのをつくって、義務接種で。こんな国はどこにもないんですよ。義務接種。だから、しなければいけない。だから、予防接種の接種率だって90何%ですよ。そうやって、子供たちを国が法律で守った。これは、私は一番大きいと思います。

しかも、今はあそこのインドなんか、日本も300億円とかいうお金を出していますけれども、アメリカがそうやっているわけですよ。助けてくれたわけです。そのころアメリカは、沖縄の占領をしていたでしょう？ それから、後で返したでしょう？ すごいですよ。ソ連は齒舞、色丹四島を取っちゃったでしょう。返さないじゃないですか。そんなところで私は、アメリカという国は大したものだなあと思いましたね。

これは個人的なことになるけれども、アメリカの素晴らしさ。アメリカがすべていいわけじゃないけれども、私のいところが、16歳で少年兵になったんです。少年航空兵。15歳で航空隊に入って、飛行機乗りに。戦争が始まって、昭和16年に飛行機に乗って、特攻隊になって、フィリピンのマニラで爆弾をしょって、敵の軍艦に突っ込んだんです。まだ16歳ですよ、特攻隊。それで、名誉の戦死ということで通知が入って、お葬式までしたんですけれども、戦争が終わったら帰ってきたんです。

「どうした？」と言ったら、途中まで突っ込んだんですって。要するに、爆弾をしょっ

ているんですから、ぶつかって、そこで爆発して自分も死ぬわけですから、敵艦に向かっていくわけです。いとは通信兵だったんです。それで、そこまでは覚えているんです。途中で落っこっちゃったらしい。爆発しないで、海の中へ。そうしたら、アメリカさんが助けてくれた。

質問者1 へえー。

巷野 考えられる？ 雨あられのこうやっている中であっぶあっぶやっていたら、戦争でもって助けてくれた。

質問者1 よかったですねえ……。

巷野 それで、それからずっとオーストラリアの捕虜収容所に入っていた。16年から20年まで、4年、5年。そして帰ってきた。それを聞いてね、アメリカというところのヒューマニズムというか、その点は、僕は今でもそう思っているんですけども、アメリカのすべては好きではないけれども、個人、人間というものを尊重しているね。

結局、そういう考え方が戦後の日本へ来て、そんなに人間的に悪いことはしていなかったと思うし、助けてくれたわけです。しかも、赤ん坊なんかをね。それが児童福祉法という、ああいうものに表われているのかなと。私はもう、おかみ法案のためだと、われわれは負けたと。そういうようなことがありました。

それで私は、毎日のように統計を取ったりしながら、それを国の行政に反映させるわけですね。ミルクが足りないとなれば、農林省へ行って農林省にアドバイスして、もっと牛を増やしてくれということで、農家に飼料を。物資の飼料なんかの配給をやる。参考資料なんかとして持っていくということをしたり。それから、肢体不自由児といいましょうか、股関節脱臼か何かになったらすると、それをどうするか。股に、足をもっとこうやって開くようにする。そういうもののパンフレットをつくって、市町村を通じて全国にまいたり、そんなことをやっていました。そこに助産婦さんもいたし、保健婦さんもいたし。

当時の保健婦さんが今でも、名古屋にいます。瀬木という母子衛生課長は、その後、統計調査部へ。要するにアメリカさんに盾突くことが多かったものですから、アメリカに嫌われて（笑）。それで、母子衛生課は……。もう、本当にバンカラなんですよ。たばこを吸うといったってきせるでしょう。ナタアメギセルでしょう。自分で詰めてやる。当時ね、一緒にアメリカへ行くんですよ。今のちょうど皇居のすぐ前の明治生命かどこか、今でも残っている新築のGHQ。そこへ行ってしゃべっていると、目の前でたばこがなくなると詰めて、ぽんぽんとたたいて。嫌がるんだ、それを（笑）。向こうはぴーんとしてますよね。それで、汚いのを着て行って、課長がかーっとたばこを吸って。ある意味、かわいそうでしょう。嫌がらせて飛ばされちゃったの。統計調査部長で。

そこで自分は産婦人科だものですから、しかも厚生省という力を使って、日本中の癌を調査して、産婦人科で。子宮癌とか、内科の方とか。あれがものすごく、今でも基礎にいいんですよ。日本の癌、特に女性の癌を、あのころ随分まとめて。それがその後の癌の対策で随分日本の力になっている。

厚生省を辞めてから、すぐに東北大学の公衆衛生の教授で行って、そこで癌をまたやって、世界中の癌の統計を調査する。それからあと定年で辞めてから、自分のお父さんが名古屋の女子大、お父さんがやっていたので、そこの学長になって行って。そこでも、厚生省から連れて行ったさっきの助産婦さんを連れて行って、ずっと研究をしていて、その後、亡くなりました。基礎をつくったのが瀬木さんで、母子手帳などをつくったり、癌の対策、それからまた福祉。当時としては、日本の小児保健のつぼを突いたところを、彼一流の強さで押し通していきましたね。

自分のやりたくないことはやらないで、やることはぐーっと押し去っていったから、今から考えると随分と実績が出たんじゃないでしょうか。無駄なことはやらない。それで乳児死亡率が大きく変わってきたというふうに思いますね。

質問者1 さっきおっしゃっていたミルクとかおむつとか、そういうふうにもらったものというのは、割とスムーズに行くべきところへ、情報としてこう伝わって……。

巷野 当時、世田谷に乳児院があったんです。今は世田谷の小児病院になったんですけども、乳児院に産科なんかがついていて、しばらくやっていたんですが、もう3～4年前になくなりました。

要するに、当時は乳児院というものがあちこちにあったんです。保育所は保育所で必要ですよ。預かりお母さん。しかし、お父さんもお母さんもいない子供だっていますから、それから、犯罪も多かったですからね。お母さんが刑務所に入ったとか、それから捨て子も多かったんでしょうね。そういうのが乳児院に入るので、世田谷乳児院は非常に大きかった。

当時私は、厚生省に2年半ぐらいいて、また大学へ戻ったわけです。臨床をやっているときに、今もありますけれども、板橋に整肢療護園という随分大きな肢体不自由児施設がありました。肢体不自由児施設ができて、それを東大の高木という整形外科の教授が任されて、充実したんです。肢体不自由児施設。そして、私は一緒にいた小池という整形外科の若い……私より数年上ですけども、国のお金で外国を回って、諸外国の肢体不自由児施設を見学してきて、それを取り上げて、恩師である東大の整形外科の教授も来て、整肢療護園を充実したんです。そして、クリッペルハイムとしてのいろいろを、何とか整備をしましたね。要するに子供の肢体不自由児。一番多かったのは、脳性まひ、股関節脱臼、くる病で背中が曲がっているとか、随分おりました。

そのころ私も大学の方に戻って小児科の臨床をしていたんですけども、肢体不自由児施設の板橋の整肢療護園で、整形がいてやっているんですけども、小児科の医者がいないということで、誰か小児科に来てくれということで、私は小池さんらみんな知っていますから、週1回、小児科医として整肢療護園へ行きました。

でも、私のやる仕事は、要するに感染症が多いんです。赤痢がはやったり。赤痢がはやっても抗生物質はないものですから、当時はピオフェルミンが効くということで、ピオフェルミンを茶碗1杯飲ませたりね。

質問者1 ビオフェルミン自体を茶碗1杯ですか？

巷野 そう。乳酸菌ですから、それでもって押さえちゃった。効きましたよ、随分。

質問者1 そうですか。

巷野 練っちゃってね、あんこみたいに。かぶせて、がぶがぶ。乳酸菌で押さえちゃえと、そんなことはやっていなかったけれども、ほかにやりようがなくてね。血便が出ているでしょう。そんなことで、またそこで小池さんと一緒になって、それから小池さんはその院長になって。要するに、日本の肢体不自由児施設の本場にオーソリティーですね。大きくなって、今もやっています。

私はそこに時々行って。それもよかったです。僕は大学でほとんど給料をもらっていませんでしたから、そこへ行くと少し金をもらえてね。そのころ私は結婚したんです。金がなくてね、結婚したんですけれども。大学からもらうのは本当に細々として。子供ができてどうしようもなく、喜んでアルバイトに行きました。

それはもう、私個人のことだけを言えば、臨床ができて、厚生行政という中で仕組みを、短いけれどもできまして。厚生省へ行ったときには、子供を見る目が変わりましたね。全体を見るようになった。毎日乳児死亡率をやっているわけでしょう。世界の乳児まで。全体として見るのが何ともなくなったというか、そういうふうに見えたというか。

臨床をやっているときは1対1で、この子供を見るわけですよ。体温がいくらある、便がこうだ。子供を見る時はそこだけなんです。それをやってから厚生省へ行って、乳児死亡率、下痢症なんてやったものですから、何となくその子供を治すときも、その子供だけではなくて、その家庭はどうだろうかとか、風邪をひきやすい子供のときは、家庭の構造はどうだろうかとか、結構ありましてね。赤ん坊の寝ているところのちょうど横にすき間風が来ているとか、そういう見方を勉強した感じがします。

ただ風邪を治すのではなくて、もちろん診察して、その子供を治すわけですが、風邪をひきやすいというときに、その子供の免疫はどうだろうか。それだけではなくて、風邪をひきやすい環境ではないだろうかということで、お母さんに、「どんな部屋ですか」と聞いて、「こんなです」、「どの辺に寝ていますか」なんて。「子供は廊下ですね」なんて、「そこは大丈夫？ すき間風、来ない？」なんていう、そういうね。公衆衛生というのはそういうものでしょうけれども、大学にいただけだったら、ずっと今もってそうじゃないかなという感じがするんです。

それからあと、高木さんという東大の教授が行った整肢療護園でお手伝い。集団という中の子供を見たから、随分私は勉強になったと思います。それからまた、その医局にいたころそこへ通っていたんですが、そのうち、今度は八王子に乳児院ができる。都立の八王子乳児院ができるということで、その院長を求めている、東大の小児科に誰か出せと来たんですね。私はもう厚生省にいて、小児科の人なんか知らないですからね、乳児院だといったって。私は厚生省にいるときに児童福祉法に関係して、乳児院のいろいろな規則をつくった立場でしたから。乳児院には何を買ったらいいとか、最低基準なんていうのをね。

質問者1 先生が整理されて。

巷野 そう。児童福祉法の中に児童福祉施設ができて、法律ですから、備品ではどのようなものを置くかということまでつくらなくちゃならなくて、私は見よう見まねでいろいろなことを聞きながら。

質問者1 中の衛生環境とかそういうものを含めての基準ですか。

巷野 そうそう。例えば、保育士さんがいいのか、保健婦さんがいいのか。結局保健婦さんにしちゃったんですけどね。後でそれはよかったんですが。保健婦さんは赤ちゃん何人に1人がいいのか、そんなことを先輩とか何かに聞きながらつくって、それからベッドの高さはどのくらいとか、赤ん坊はゼロ歳、1歳の子供が入りますから、保護者が必要とか、あるいは歩行器とか、何か遊ぶ物が必要だと。最低基準は何を置くべきか、そんなものをつくってね。

質問者1 おもちゃとかの基準もあるんですか。

巷野 そうそう。歩行器を置くとか、いろいろなそういうね、つくったんですよ。それが後でまたいろいろな関係が出てくるんですけども。だって、部屋に何もありません。だから、何か置かなくちゃならない。はいはいをできるくらいから歩行器に乗せて子供を遊ばせたりするとか、日光浴をしなければいけないとか、そういう最低基準というのをつくったわけ。いい勉強になりました。

そんなことがあったものですから、大学の方に乳児院へ行く人はいないかと言ったら、教授がもう真っ先に、「おまえ、行け」という話。昔は命令ですからね。「へ？」というわけで、乳児院へ行って、そうしたらまだカーテンなんかも十分でないので、カーテンを買って、それから当時保健婦さんが全部新しく、東京の保健婦の学校を出た若手が何人か来て、人を集めて、それから事務員が来て、都立の乳児院ができて。まだ赤ん坊は入ってこないものですから、毎日白いカーテンを、白じゃあかわいそうだということで、染料を買ってきて染めたりね。

質問者1 中でですか。

巷野 うん。昼間、みんなで染めたり何かしてね。本当に和気あいあいと、家庭をつくろうと。ね。役所じゃないんだから家庭的にしようということで、染料で染めたり、おもちゃを買ってきたり。そうしたらもう本当に、どんどん子供が入ってきて。もう1週間のうちに1人、2人は、朝になると捨て子です。当直を随分やりましたけれども、朝になると泣いているんですよ。ひーひー泣いています。

質問者1 門の前ですか？

巷野 みかん箱に入っているの。ひーひー泣いている。

質問者1 どのくらいのお子さんなんですか。

巷野 生まれて間もない。

質問者1 すぐの新生児ですか？

巷野 うん、数日ぐらい。ひーひー泣いているんです。でも、冬寒い中でも、死んだのは

1人もいない。だから私はもう、子供というのはいかに強いものかと。寒さに強いなあということ、そこで実証を得たんだ。死んだ子供はいないですよ。暑さには弱いです。だから、子供を丈夫にするなら薄着だということは、そういうこと。今の育児の中では自信を持っているんです。死んだ子供は誰もいませんよ。

質問者1 毎週ぐらい、そういったお子さんが？

巷野 毎週というか、月に何人もいましたね。生まれてまだ3日、4日とか、中には1カ月ぐらいとか。真綿でくるまれたりして、顔だけ出てね。寒い冬ですから、チアノーゼなんか出てね、でも死なない。いかに動物というのは寒さに強いかなあということが分かりましたね。

でも、健康な子供だけを見るので、そこで勉強になりました。当時の保健婦さんと、今でも付き合っている方がいます。

乳児院にいるときに、2年ぐらいたったら、今度は大学の方から、札幌の市立病院に行く人はいないかと。戦前からずっと東大関係の人が行っているんです。その小児科の医長が、また東京へ戻ってくる。同愛病院に戻ってくるということで、札幌の市立病院へ誰か行く人はいないかと、札幌市立病院の院長が、東大の小児科に人集めに来たわけです。

私は、乳児院もそろそろ2年たったから、どこかあったら行きたいなんて言っていたものだから、教授が僕を推薦しちゃったわけだ。そうしたら、院長が会いたいと、電話がかかってきて。何の用事か分からない。札幌の病院の院長が会いたいと。教授からの紹介だと。今でも覚えているね。新宿の高野。あそこで会った。そうしたら、教授が先生を推薦したと言うんだ。札幌の病院へね。「へ？」って（笑）。そうしたら、その前の教授も僕を推薦したというんだね。2人。「へえー」ってわけだね。さっき言ったように、私はもう、兄もうちにいるしどこへ行ってもいいようなあれだから、「じゃあ行きましょう」と。うちへ帰って言ったらびっくり。戦争が終わった後です。「へ？ 札幌に？」、子供がびっくりこいちゃって。

質問者1 すごいですよね。

巷野 札幌へ行ったのが昭和31年かな。その前の1年、2年は八王子医院にいるから、31年。

質問者1 28、29年が八王子。

巷野 確かそうだったと思いますよ。僕は31年に行った。当時、JALが飛び出したころなんです。その1年か2年の間に。プロペラ機ですよ。当時の金でいくらだったかな。列車に乗っていくと、27時間ぐらいかかるんです。僕は札幌へなんか行ったことがない。そんな20時間もとどこへ行ったら、嫌になっちゃうと思ってね。都を辞めるときに退職金というのをもらった。ちょっと。それを全部使っちゃって、飛行機に乗って。

質問者1 飛び始めたばかりの飛行機に。

巷野 みんな驚いちゃった。「へ？ 飛行機に乗って行くんですって」と。それで行った。都立の乳児院だったでしょう。都の私の上役、母子衛生課長というのがいたの。都の母子

衛生課長というのも大学の先輩で、小児科の医者だったんです。それとか数人が都庁で見送りですよ、羽田まで。それに乗って。

その前にまたその話があるんだけど、向こうへ下りたら、そこの飛行場で向こうの病院の医局員が4～5人いたんです。全部お出迎え（笑）。

質問者1　すごいですね。総理大臣並ですね。

巷野　向こうへ下りると、その晩、きょうの飛行機の搭乗者というのが新聞に出るの。JAL（日本航空）第何便、搭乗者、誰々。

当時小樽の市立病院があって、そこには慶応の小児科が行っていたの。そこの医長をしていたのが、僕が軍隊に入ったときに一緒にいた慶応のドクターだったの。

質問者1　一緒に台湾に行かれた方ですか？

巷野　台湾ではない。その前に軍医学校というのに入れられたから、そのときに同じグループだった。まず顔を出して、それが向こうの医長だった。だから新聞を見て、巷野が来たということですぐ電話がかかってきた。その人は間もなく、私が行って1年ぐらいたってからかな。今度は川崎の市立病院へ行ったんだ。それから慶応へ戻って教授になったの。市橋とって、小児科の医長をしていたのかな。会いましてね。それから私は札幌へ行って、昭和31年、32年のころ、日本でポリオが大流行した。32年かな、あれは。1年ぐらいつづけているかもしれませんが。ポリオが大流行したわけです。それで札幌でも、北海道でも随分ポリオが流行したんです。呼吸器まひなんかで、鉄の肺を入れたりして。日本中がポリオで……。

質問者1　札幌で入れられた。

巷野　入れて。いい勉強をしました。2台ぐらい入れましたかね。もうポリオで呼吸器まひですから、鉄の肺が役に立ったんですね

当時、未熟児医療もだんだんと始まってきたんです。話はさかのぼりますけれども、私が医局にいましたね、昭和20年代の終わりとか、そのころ、話をした馬場一雄。同級生なんです。彼は賛育会病院へ行ったの。賛育会病院ってあるでしょう？埠頭のね。そこの小児科に行って、彼も頑張り屋だから、小児科で未熟児を始めた。当時、賛育会病院に、順天堂の小児外科医をやっていた駿河という同級生が、外科なんですけれども、大学から派遣されて行っていたんです。馬場君もそこへ行っていた。同級生ですから。馬場君は未熟児を始めた。あそこは下町の、ものすごく赤ん坊が生まれるところですね。だから、もう新生児がたくさんいる。未熟児もたくさんいる。あそこで彼は名を上げちゃったわけです。未熟児の方で。

保育器なんか無いものですから、木の箱をつくって、結局その中に入れると思うけれども、あつためるのに電球を中に入れたり何かして、それをつくった。当然そういう新生児未熟児をやっていると、生まれつきの奇形の子供がいるでしょう。それを同級生の駿河が手術。ヘルニアだとかいろいろな手術。彼はそこで小児外科をマスターした。それで順天堂へ戻って、小児外科の教授になった。馬場君はそこで未熟児なんかをたくさんやって、

それからまた東大へ戻ったのかな。それから日大の方へ行って、日大の教授になっていったわけ。それで彼は、新生児未熟児の大家になった。

馬場君が賛育会病院に行っているときに、彼が病気になったことがあるんです。半年ぐらい確か休んだの。そのときに私は、馬場君の代わりにそこへお手伝いに行っていたの。賛育会病院。それで、彼がやっている未熟児の問題も何となく覚えていて、それがあったものですから、札幌の病院へ行ったときに私も未熟児を。北海道で未熟児をやっているところはないものですから、やろうということで、賛育会病院でやっていた方式の木の箱をすぐつくらせて、未熟児なんかをやって。

質問者1 それは何か、もう本当に既製のものがあるわけではなくて。

巷野 何もない。買ったら高いですから。自分たちで、この半分くらいの木の箱をつくって、その中にこのくらいの枠、さんを入れて、下に電球を入れて、電球であつためる。その上にマットを敷く。ふとんのあれを置いて、そこに赤ん坊を寝かせて。

考えてみれば不潔ですよ。でもまあ、上に手を突っ込む穴を開けて、穴に手を入れてやったりして。当時としては、随分注目されましたよね。未熟児はここへ来る。

質問者1 もう、頭で覚えている範囲で自分なりに設計図を引いてつくっていったと。

巷野 それで当時、新生児未熟児研究会というのをつくって、年1回あちこちで、箱根でやったりしてね。それはもう本当にどてらを着て、夜、親しい人たちで全国から集まって、「どてら会」と名前を付けてね。馬場君に聞いてくださると思います。そのころは私も随分進出したんです。それから後、私は未熟児はやらなくなっちゃったんですけど。

それで31年に札幌へ行って、東京へ戻ったのが39年。ちょうどオリンピックのときですね。東京へ戻って、駒込病院に行ったんです。あそこが新しくなって。

質問者1 札幌は随分長かったですか？

巷野 8年いましたね。うちの子供たちは、行くときに1歳と3歳だったかな。だから、向こうで小学校、中学、上の子供たちをやって、こちらへ来ましたね。

個人的なことを言わせてもらえば、とてもよかったですね。のんびりしてね。それに、何というか東京にいと食っていけないわ。本当は金ないんだよ。質屋へ随分行きましたね。向こうへ行ったら、ちゃんと向こうの市立病院。札幌市立病院というのは昔から北大に次ぐ大きな病院としてあって、札幌医大はそのころできたんですけれども、古い病院です。北大に次いで、昭和始めごろにできた、明治のころにできたのかな。

そこに、戦争前に東大の小児科の方から弘（ひろ）好文という先生が医長で行ったんです。戦前ですから、本当に山の中でしょう。小児科の医長で、市長さんよりも月給が高かったというから。そこで小児科を設立して、患者が多かったらしいですね。そこに医局員がいて、田坂という若い医局員がいて、そして教授と、まあいろんなことをやりたい放題でやって、素晴らしい研究をして。今でこそ当たり前ですけど、風疹の病気はウイルスだということを発見した人です。

質問者1 知らなかったです。



巷野 今の教科書に載っているかどうかですけれども、古い、ドイツの教科書なんかには載っているんです、今でも。ヒロ・タサカ。要するにウイルスを発見した。

どうやってやったかという、風疹の患者の飛沫液、唾液とかこの辺からぬぐって何かを取って、それをこちらに濾過してうつした。それで発症しちゃった。だから、ばい菌ではなくてウイルスだと。これがもう世界中の問題。要するに風疹はウイルスの病気だという。ヒロ・タサカ。ものすごい……。

質問者1 濾過性の病原体だからということなんですね。

巷野 そう。だから、同定はできないですよ。難しいです。濾過していない。最近の本では載っているものがありますよ、ヒロ・タサカと。その方が随分研究して。後で、札幌の乳児院の院長になってね。そこでは健康な子供がたくさんいるものだから、もう研究のしようがない。やがて弘さんは、戦後、北大の教授になっていたんです。

弘教授が北大の教授になるときに、戦後ですから、東大の小児科にいて、戦争中、それこそインドネシアの方のジャカルタ……なんとか医大というのが戦争でできてね。台北の小児科の教授で行って、それからインドネシアの教授になって行った村上教授というのがいたんです。また先輩で。

村上教授が、戦争が終わって日本へ引き揚げてきて、そのまま東京を通過して、札幌の市立病院へ行った。北大の教授になった弘さんの後。村上氏。そこに数年いて、そこから日本医大の教授になって来たわけ。その息子が今、小児保健協会の会長。村上、知っているでしょう？ 日本医大の教授になった。親父の後を継いで、息子が教授になって。

駒込には昭和39年に戻ってきました。その年はちょうどオリンピックの年だし、それから新幹線が通ったりする年で、あそこは伝染病院になるので、随分伝染病の勉強をさせられました。横田という内科の部長がいて、これは日本の内科で伝染病の大家です。子供の伝染病の予防は何かといつも彼に言われたのは、糞を食うなど。糞を食わせるな。伝染病というのは糞から来る。排泄物ですね。「だから巷野、手を洗うことだよ。」と、いつも言われていましたね。耳にたこができるぐらい。今はそれがやっとな、手を洗う、風邪の予防も手でしょう。いつも言われました。

その横田という人は、昭和40何年かな、羽田から福岡へ行くJALが乗っ取られたでしょう。あれに乗っていたの（笑）。内科学会があったんですね。3月29、30、31日、4月1日かな。内科学会があるので、その飛行機に乗っていた。日野原さんと一緒だった。

よど号で行って、福岡へ着いた段階で年寄りだけ、ある年配の人だけ降ろされた。その中に横田さんが入っていて、よかったんだ。福岡で、日野原さんと一緒に降ろされたんです。その後は、平壤へ行っちゃったんですね。そういうことがあってね。

それがどうしてすぐ分かったかという、出張で行ったわけですよ、福岡へ学会で。そうしたら、学会が3月30、31日、4月1日かな。2年にまたがるわけ。年度が変わるわけ。そうすると、事務の人はそういうことを嫌うわけ。だって、前年度のお金と翌年度のお金は違うお金になるわけです。収支がややこしいですわね。それをごまかして、どっちだっ

たかな。前に持って来ちゃったんだっただかな。30日に行くところを29日ぐらいにして、お金をこっちへ持ってきたわけ。あるいは、その年度に行かないで、継ぎ足し買いという格好にしたのかな。どっちだったかな。

それが新聞に出ちゃったわけです。つかまった人、降りた人。そうしたら、出張してないはずなんだよ。それで問題になっちゃった。今でも覚えている（笑）。お役人というのはそういうことをやるんだけどね、そうやって引っかけちゃうと困るんだ、予算というのは。またがっていると、出張の紙を本当は別々に出さなきゃいけないけど。どっちだったかな。翌年にもって行って、こっちは出ていなかったのかな。でも本人の名前が出ている。見たら、出張してないはずだったのかな。そんな覚えがありますね（笑）。

この駒込病院は、昭和40年代になると、もう伝染病も少なくなってきた。そのころから、だんだんと伝染病なんかの陰りは少なくなりましたね。戦後でさま変わりしてきて、40年度になってから、もう伝染病の時代ではないと。もっと総合病院をしっかりとつくろうということで、昭和40年代になって間もなく、私は駒込病院の副院長になったんです。

昭和50年の終わりころになって、それまでできた設計図、総合病院をつくろうということで、われわれがつくったんです。産婦人科だつて必要だしということで、もう感染症じゃないということで、そういうふうにつくったんです。

そのころ、都の方から、都の相談役というんですかね。そういう医療は、もう総合病院の時代ではないと。それは地元任せればいいんだと。癌をやれ、癌を中心にしろ。一般の病院ではできないんだからと。それと、総合病院はいらないといっても、これからは少ない感染症がありますね。いろいろな熱帯ではやったり、特殊な伝染病院をつくれということで。だから、伝染病と癌を中心とした病院にしろということで、設計図が変更になっちゃったわけです。

それで、昭和50年、51年、3年間かかって駒込病院をつくって、51年に完成したんです。50年に完成したのかな。癌病院をつくるということで、癌専門の弘前大学の教授が院長で来て、その一派がずっと集まって、癌病院ということで出発した。私は小児科でご用済みですから、副院長になったんですけれども、院長の下で働いた。それからその次に、また新しくなった府中病院の院長で出て行ったんです。そこを定年で辞めて、移ったんですけれども。

ですから戦後をずっと見てみますと、一番先に厚生省というところで福祉保健というものを見て、基本的なものに自分自身で関係したということで、私としては非常に勉強になったということですね。それから臨床に戻って、その後、自分たちが関係した児童福祉法の肢体不自由児施設とか乳児院というところの現場へ行きまして、それからあと、札幌で小児ポリオの問題。

札幌にいたころ、昭和30年代です。病気の問題も大事だけれども、育児相談などもやらなきゃいけない。それから健康診断、定期検診とかというのが昭和30年代のころ活発だったんですよ。児童福祉法の中のいろいろな健診業務、1歳半、そのころは要するに健診で

すよね。巡回とか。始まったのは30年ごろなんです。だから昭和20年代というのは、育児相談はまずあまりなかったんです。

私は東大の医局にいたときに、育児相談をやろうと。病気の治療ばかりではなくて、実際に診療をしていると分からないことが随分あるから、例えば日光浴をした方がいいとか、いろいろな指導が小児科にはある。それを私は厚生省にいたときに習ったというか、身につけたわけ。ただ病気を治すだけではなくて、環境とかそういうものが子供にとって大事だということで、東大に戻ってから育児相談をやろうと。

診療をどうするんだと。保険も始まっていますから、お金を取るのか取らないのか、いろいろあったけど無料でやっちゃった。学校とか教育だから。私の同期で、3～4年下の草川というのがいて、それと2人で育児相談を始めた。日本では早かったんです。どさくさでというか、みんな伝染病が多かったり、病気の治療が中心なのに、健康の子供を集めていたんです。育児相談をやった。結構これがよかった。その草川というのと一緒にやって、それがその後、女子医大の教授になった。草川三治。あの息子が医者になって、今、聖路加の小児科にいますよ。その2人でやって、お互いに勉強になってね。健康な子供を見るという。今では当たり前だけど、当時はちょっと珍しかったかなと思いますね。

質問者1 一般的なというよりは、本当に先生のところだけで。

巷野 そうそう。ほかではあまりやっていませんでしたね。やっぱり僕は、厚生省で健康な子供をどうするかということなんかを地域的にやっていたけれども、例えば北国では日光浴をしようとか、外であったまるんですから、生活が大事だということでやっていたんです。

それから昭和30年代になると、児童福祉法で健診というのが始まりました。そうしたら昭和30年代のころ、民間でもそういうことを始めた。母子衛生研究会というのは知ってる？ 聞いたことはありますか？ 今、あるでしょう、母子衛生研究会。江井さんという方が会長で、あの人が健診業務を始めたわけです。民間でね。育児相談だとか健診というようなもの。国からお金をもらわないで、業者とかいろいろなスポンサーを付けて、東京で初めて。それから昭和30年代になって、札幌に出張所をつくったんです。そのころは札幌にいたものですから、そのころ江井さんとの関係ができて、札幌で健診を始めて、車に乗ってあちこちで。あれはどこでしたか……、お年玉なんかとかいろいろ、基金で集めたのがあったでしょう、あのころには。

質問者2 歳末たすけあいみたいな。

巷野 そんなものでお金は集まらない。郵便で集める、いろいろなことを。そういうのが寄付するんでしょうね。検診車を寄付したりね。

札幌で少し車に乗って、団地へ行って、団地の健診を始めたり何かして。それから美唄という炭坑があるんですけれども、そこに定期的に行って、炭坑の子供たちの健診をしたりして。あれがいい勉強になりました。

質問者1 それは、ドクターとしては先生が1人。

巷野 そうそう。市立病院から交代で、毎週1回。

質問者1 どのくらいの赤ちゃんを……。

巷野 何十人と来ましたね。炭坑地区の。

質問者1 大きな炭坑ですよ。名前も残っていますよね。

巷野 美唄炭坑というのは大きいですよ。いい勉強をしました、あのころは。くる病が多いんです。北国で、ビタミンDが足りない。それで毎回くる病の検査をやって、レントゲンを撮ったりして、くる病の人に対して日光浴をなさいますとか。

質問者1 その場でレントゲンを撮って。

巷野 そうそう。そうするともう、胸に変化がある。生後3か月、4か月で。統計を取ってみると、炭坑ですから、山あいにあるんです。真ん中に美唄川という川が通っていて、両側がこういう山なんです。炭坑地帯はここにあるわけ。そうするとこちらから太陽が出ますから、こちら側は日が当たらない。こちらは日が当たる。これは三菱ですけども、日が当たる方に三菱の社員が住んでいる。偉い人が。こちら側は穴を掘る人、労働者が。それで両方の検診をやっているでしょう。統計を取ってみると、どっちにくる病が多いか。こちらにくる病が多いんです。日が当たらないから当然です。こちら（日が当たる方）は少ない。

質問者1 そんなにはっきり出るんですね。

巷野 それを学会で発表しようとしたら、会社から、「先生、勘弁してくれ」と。「そんなことをやったら大変なことになる。こちらにくる病があるなんていったら、日が当たらないのに」。さすがにできなかつたな、発表は。大変だ、発表はできない。労働争議が起きますよ。それで一生懸命日光浴。

質問者1 日光浴をしてもらって。サプリメントみたいなものはあるんですか。日光浴だけで？

巷野 大体、日光浴とビタミンD、肝油を飲ませたね。戦後ずっとたっていますから、今はもう炭坑はほとんどないでしょう。

質問者1 資金的には、そういう寄付とか何かのお金を……。

巷野 それは、われわれが三菱美唄に頼まれて行ったんです。ですから、医局のアルバイトをしたわけです。こっちから金が出ているんですよ。要するに職員の検診をしてほしいと。だから、そんなことを学会で発表されちゃ困るわけだね。自分たちがやっていることをね。そういうようなことが出てきた。

質問者2 東大病院の育児相談のときなどは、大体1日何人ぐらい？

巷野 何人ぐらいでしょうね。やっぱり5～6人ぐらいだね。当時来た人の名前を覚えていたんですよ。牧さんという人がいつも子供を連れてきて、そのうちが印刷屋でね、草川君と2人で明解国語辞典というのをもらったことがある。今でも売っているけど、牧さん。ちゃんと裏に「牧印刷屋（牧製本印刷）」と書いてある。僕は今でも板橋の健診に行っているんですけど、自転車に乗っていると、牧印刷屋ってあるんだ。内々に聞いたら、